

登場人物

椎名肇

フリーター、純粹な青年

向山良兼

探偵事務所オフィス向山の所長

宍倉権造

オフィス向山の委託調査員

沙絵

良兼の秘書

鍋島恒吉

恒彦の父、八十七歳

鍋島恒彦

恒吉の息子

鍋島園子

恒彦の妻

鍋島和夫

恒彦と園子の息子

鍋島姫子

恒彦と園子の娘(高校生)

小林さん

オフィス向山の近所に住む主婦

探偵事務所オフィス向山。手鏡を使い、鼻毛を抜いている良兼。ドアをノックする音。慌てて、机の上の書類に目を通してしているふりをする。

良兼                   はい、どうぞ。

肇                      失礼します、あの、

良兼                   君、君だよ。そう君なんだよ我が社が求めていたのは。

肇                      え、

良兼                   やっぱり来てくれたね。

肇                      あの、

良兼                   （立ち上がり、肇の手を取る） 広告、見たんだろ。

肇 あ、はい。

良兼 君の為に出したんだよ、あの広告。

肇 僕の、為に、

良兼 そう、君だけの為にね。こちらには何も異存はないよ、採用だ。

肇 でも、まだ何も、

良兼 いいんだよ、すべては決まっていた事なんだから。

肇 あの、決まってたって、

良兼 いやね、今回の募集では、随分応募があつたんだよ。もちろん一人も採用はしていないよ。君を待っていたからさ。

肇 待っていたって、

良兼 インスピレーション、あるいは第六感、言葉にすると陳腐だが、私には何かこう、予知能力のようなものがあってね。

肇 はあ、

良兼 信じてないね。

肇 いえ、そういうわけじゃ。

良兼 いいんだよ。我が家は父の代まで仏門に使えて来たんだが、先祖の積んだ苦行や功德が、私の代で実を結んだんだな。三十代前にさかのぼると、弘法大師の一番弟子だったんだよ。

肇 すばらしいですね。あの、ところでこちらは、一体どんな仕事をなさってるんでしょうか。

良兼

あ、そうだったね。広告には、何も載せてなかったね。

肇

君だよ、君なんだよって、それだけで。でも、それでかえって気になっちゃたんですけど、

良兼

そうだろう、来てくれると信じてたよ。

肇

表の看板は見たんです。でも内容が今一つ想像出来なくて、

良兼

家庭円満アドバイザー、社会の平和クリエイター、オフィス向山。私が所長の向山良兼です。君は…あ、名前、

肇

肇です、あ、椎名肇です。

良兼

あそう、じゃあ、肇君ね。肇君、君はこの世の中をどう思うね。

肇

世の中、ですか。

良兼

そう、世の中、現代社会だよ。

肇

：あの、みんな頑張って生きてるなって、

良兼

うん、なるほど頑張って生きている。しかしそれは正しい努力だろうか。人間は本来互いに助け合い、いたわり合って生きていくように生まれて来たのではないだろうか。しかるに、情けは地に落ち、徳の道はすたれ、上辺だけの虚飾の繁栄は人々の目を眩ませているのではないだろうか。国を治める政治家は権力闘争に明け暮れ、民は心を亡くして物質文明のもたらす空しい享樂に溺れてしまっていないだろうか。

肇

はあ、

良兼

そうだ。君が言うように確かに荒廃している。

肇

あ、いえ僕は何も、

良兼

しかし、嘆いてばかりいても始まらない。今や健全な社会を築く事は日本国民共通の命題であるはずなのだよ。では、健全な社会の基盤とは何だろうか。

肇

え、健全な社会の基盤、ですか？

良兼

そう、それは堅固な家庭だね。

肇

あ、そうですね。

良兼

しかし、ガン細胞のように家庭を蝕み、やがて崩壊へと導く複雑怪奇に組んだ現代人の欲望という名の病巣は、もはや個人が立ち向かうにはあまりにも強靱な力を持ち、その病根はジネンジヨの根のように根深くセイタカアワダチソウの根のようにしぶとい。だからこそ、日本の幾千万の家庭に、愛と希望の光をもたらすべく、立ち上がったのがこの探偵社、オフィス向山なのだよ。

肇 分かりました。こちらは探偵事務所なんですな。

良兼 探偵事務所、興信所、様々な呼び方はあるが、私はあえて自らを家庭円満アドバイザー、社会の平和クリエイターと呼んでいるのだよ。

肇 でも、俺に探偵なんてつとまるでしょうか。これといって特技もないし、腕力だつて必要なんでしょう。

良兼 問題は素質や才能ではない。君が選ばれた人間だということ事なんだよ。今日この日、出会うべく定められていた君と私がこうして出会ったということなんだよ。

沙絵 (上手より登場) ようこそオフィス向山へ。私、秘書の沙絵です。

良兼 突然入ってきた君を見た瞬間に、頭のとっぺんからつま先まで電流が走った、まさに運命の出会いっていうやつだ。



肇 (沙絵を見ながら) 運命の出会いですか、あるんですね、そんなことって。

良兼 そう、運命の出会いだよ。(シーン変わりの音楽、明転)

(舞台中央、上手より沙絵、良兼、肇)

良兼 一つ、調査員は、沈着冷静にして質実剛健、清廉潔白にして勇猛果敢なるを旨とすべし。

肇・沙絵 一つ、調査員は、沈着冷静にして質実剛健、清廉潔白にして勇猛果敢なるを旨とすべし。

良兼 一つ、調査員は、慈愛に満ち情けを尊び、然るに義をなすには大胆不敵なるを旨とすべし。

肇・沙絵 一つ、調査員は、慈愛に満ち情けを尊び、然るに義をなすには大胆不敵なる

を旨とすべし。

良兼

一つ、調査員は、常に心身の鍛練を怠らず、時に臨みては身を呈して社会秩序を守を旨とすべし。

肇・沙絵

一つ、調査員は、常に心身の鍛練を怠らず、時に臨みては身を呈して社会秩序を守を旨とすべし。

良兼

一つ、調査員は、家庭円満アドバイザー、社会の平和クリエーターなるを旨とすべし。

肇・沙絵

一つ、調査員は、家庭円満アドバイザー、社会の平和クリエーターなるを旨とすべし。

沙絵

祝詞。(のりと)

良兼

天照らす、み神の愛でし本邦の、幾千万の庵にて、安けき日々よ永久なれと、

武の皇子に成り代わり、平成の世に悪を討つ、探偵の生業に加護を賜らん。

(良兼、柏手を打つ。肇もそれに合わせる)

良兼

さて肇君、先週頼んでおいた旭町のビラは全部貼り終えたかな。

肇

ええ、張りました。でも探偵事務所なのに迷子のペットを探したりもするんですね。

沙絵

志はいくら高くても霞を食べて生きて行くわけにはいかないでしょう。この業界も不景気だし、ペットの捜査は手間を考えると割がいいのよ。

肇

すみません、変な言い方しちゃって。

良兼

恐縮しなくてもいいんだよ、君はこれからいろんな事を学んで行くんだから。

肇

はい、

良兼

それにペットの捜査も金儲けより人助けでやってるんだ。たかがペットと馬鹿にしちあいかんよ。大好き猫好きの人達にとって彼らは家族同様なんだから。

肇

はい。

良兼

そうだ三丁目の黒岩組事務所、入り口前の電柱にもちゃんと貼つといてくれたかな。

肇

ええ、言われた通りに。事務所で飼ってる犬に吠えられちゃって、ちっちゃい奴なんですけど、中からヤーさん出てきたらどうしようかって、怖かったです。

良兼

ご苦労さん。そうやって修羅場をかいぐぐって一人前の探偵になるんだよ。

肇

はい、頑張ります。

良兼

じゃあ、肇君の研修頼んだよ。

沙絵

分かりました。

(良兼、上手へ退場)

沙絵

今日で一週間ね。どう、少しは慣れた。

肇

ええ、何とか俺にも出来るかなって気がしてきました。まだ言われた通りにやっただけで、何をしているのかは自分でもよく分からないんですけど。

沙絵

最初はみんなそうよ。

肇

とにかく頑張ります。俺も所長みたいになりたいですから。なんていうか、生き方にちゃんとしたビジョンがあって、世のため人のためってがんばっているんですよ。

沙絵 君って本当に信じやすい性格なのね。

肇 はい、みんなに言われます。でも、所長との出会いは俺にとって運命の出会いです。それに、沙絵先輩とも。

沙絵 おまけに思いこみも激しい。

肇 それもよく言われます。

沙絵 純粹すぎてこの仕事には向いてないかも知れないわね。

肇 え、

宍倉 (下手より登場) おはよう。またいつもの妙な朝礼やってたね。

沙絵 聞いてたの。しょうがないでしょ、所長の趣味なんだから。

宍倉  
そしてまたまた新人さん。

沙絵  
宍倉さん、

宍倉  
分かってるって。(肇に)俺、宍倉権造。よろしくね。

沙絵  
委託で調査員やつてもらってるの。

肇  
新しく入りました椎名肇です。よろしくお願いします。

宍倉  
沙絵ちゃん委託じゃないのよ。エージェントと呼んでくれないかな。

沙絵  
もう終わったの。

宍倉  
もちろん。

沙絵

今回は随分早いのね。

宍倉

ここんとこチンケなミッシヨンばかりだからねえ。早く終わらせて数こなさないと生活できないからさ。はいこれ(カゴを渡す)マルチーズ。(犬の鳴き声)

沙絵

ご苦労様。(受け取ったカゴを確認し、肇に渡す)

肇

宍倉さんが犬を探してくださってるんですね。

宍倉

ああ。あくまで内職ね。こう見えてもCIAとFBIの訓練うけてるからさ。

沙絵

雑誌の通信教育よ。

宍倉

俺にはもつとエキサイティングなタスクが似合うんだよ。命懸けで美女を助け出すとかさ。



沙絵

先週ハスキー犬に追いかけられたって言ってたじゃないの。飼い主は若い女性だったでしょ。

(肇、カゴを覗いている)

宍倉

あれは確かに命懸けだったけどハスキー犬の後ろからブルドッグみたいな女が追いかけてきてさ、犬より飼い主に噛まれるんじゃないかと思ったよ。

沙絵

まったく、

肇

あの、

宍倉

俺としてはさ、若い頃の吉永小百合をスレンダーにして、大胆なスリットのミニスカートをはかせたような娘が好みなんだよ。

沙絵

ずいぶん難しい注文ね。

肇

あの、

沙絵

何、

肇

あの、すみません。この犬なんですけど、これもしかして、所長に言われて  
ビラを貼った、三丁目の事務所で飼ってる犬ですよ。

沙絵

だから、

肇

だってすごい偶然じゃないですか。俺が迷子のペット捜しますってビラを貼  
ってすぐに、その家の犬がいなくなっただけでしょう。それで、えっと…。

宍倉

宍倉。

肇

あ、すみません。宍倉さんがその犬を探し出してくださったなんて。やっぱり  
あの電柱のビラを見て依頼があったんですよ。

沙絵

依頼はこれから来るの。

肇

え、

宍倉

そうか、という事は今回のミッションは君と俺の連係プレーということになるな。

肇

どういう事ですか。

沙絵

肇君がビラを貼ったのは金曜日でしょう。

宍倉

俺がその犬を捕獲したのは、昨日つまり日曜。

沙絵

ビラが目に入れば依頼は明日か明後日あたりには来るはずね。

宍倉

あの事務所、金はあるからね。犬を一月くらい隠しておいて、その間の捜査費用という事にすれば五十万位は吹っかけても大丈夫だな。

肇 だって、それじゃあ…嘘でしょう

沙絵 これが現実なの。

肇 だって、それじゃあ詐欺じゃないですか。

宍倉 あれ、沙絵ちゃんこいつシステム理解してないの。

肇 …だって、俺と所長は、運命の出会いで、

沙絵 所長は、そうやって君をここに就職させようとしただけ。

肇 そんな事ないです。初めての日だってドアを開けたらすぐに、俺が何も言わないうちに、君だよって、

沙絵 広告を出したあの週は、朝から晩まで入ってくる人全てに『君だよ、君なん

だよ』って叫んでたのよ。出入りの業者や保険のおばさんにも。

肇

ええ…。

沙絵

いくら就職難の時代と言っても、うちみたいな所じや求人広告出してもなかなか人は来ないの。たまに面接受けてくれてもみんなすぐに断ってくるし。それで所長は肇君みたいな思いこみが激しい、良く言えば純粋な人をターゲットに選んだわけね。

肇

…ひどいじゃないですか。

沙絵

肇君にだってまったく責任がないとは言えないわ。あんなおかしな広告に乗せられる人はそうそういないんだから。

肇

…。

沙絵

早く辞めて、ちゃんとした仕事に就きなさい。

宍倉

おいおい沙絵ちゃんそんな事言っていないのかい。良兼さん怒るよ。

沙絵

いいのよ。

肇

…先輩、どうして俺にこんな事話すんですか。

沙絵

肇君は正直すぎてこの仕事に向いてないからよ。

肇

人を騙して金儲けをするような仕事に、向いてなくて結構です。

沙絵

じゃあ辞めちゃえば。

肇

言われなくても辞めます(下手に向かうが、立ち止まり)…でも…でも、先輩にはこの仕事は向いてるんですか。

沙絵

私は君よりずっとずるいから。

肇  
それって、自慢ですか。

沙絵  
そうね、人間割り切っちゃえば生きていくのは楽なのよ…だけど、何故かな、一週間しか一緒に働いてないのに、君にはそうなって欲しくない。こんな興信所に長くいたらきつと君も変わっていくから。利口に立ち回るようになった君は見たくない気がする。

肇  
…先輩…(うつむく)

沙絵  
ごめんね。落ち込ませちゃった。だけど君のためだから。

肇  
(顔を上げ、微笑む)沙絵先輩、俺は変わりませんよ。そしてやっぱり辞めません。だって俺確信しました。先輩とは絶対に運命の出会いです。

(暗転)

(鍋島家の居間。椅子に座っている恒彦と園子の夫婦。二人の子供和夫と姫子)

恒彦 全員そろったな。

和夫 ジジイいないじゃん。

園子 お祖父ちゃんはいいのよ。

姫子 何よこれ。

恒彦 これから、家族会議を始める。

和夫 (笑う) 親父、なんのつもりだよ。

姫子 馬鹿みたい。あたし友達と会う約束あるから、(立とうとする)

園子 二人とも、今日だけ。パ。パの話聞いてちょうだい。



和夫　　なんだよ、お袋まで。いつもは親父とは眼も合わせないくせに。

園子　　今日は特別な。ママがパパと休戦しなくちゃならないくらい。

和夫　　今更この家で幸せごっこやってどうすんだよ。

姫子　　そうよ、あんた達が世間体気にするのは勝手だけど、家の中まで窮屈にしな  
いでよ。

恒彦　　お前達が思っているような話じゃない。心配するな。

姫子　　パパの再婚の話。

和夫　　ばか、先に離婚しなきゃあ再婚はできないだろ。

姫子　　その話だったら私の立場は単純よ。二人の離婚は大賛成。だけどパパ、あの

女との再婚はだめよ。それに腹違いの弟妹は絶対にノー。

和夫

右に同じ。なにしろ親父の配偶者になるっていう事は、この家の財産に対して大きな権利を主張できるって事だからね。お袋とは出来るだけ少ない慰謝料で別れて、再婚はしないで、俺達の取り分を少しでも多く残してもらったら文句ないな。

園子

何も知らないんだから。偉そうなこと言っても二人ともまだ子供ね。

姫子

知ってるわよ。配偶者っていうのはパパが死んじやったら財産の半分を貰えるのよ。子供はその残りを頭割り。だから私たちにとって配偶者の存在は脅威ね。それに子供も増えればそれだけ私たちの取り分が少なくなるのよ。(和夫に)できればあんたにも消えてもらいたいくらいよ。

和夫

お互い様さ。しかしお袋が途中で降りてくれるのは俺達にはラッキーだよ。

園子

(恒彦を)この人はそう簡単には死なないわよ。あのお祖父ちゃんの息子よ。

他に取柄はなくても寿命だけは長いに決まってるでしょ。

姫子

ママの気持ちは分かるわ。私が同じ立場でもこの先二十年も三十年もパパと暮らすなんてまっぴらよね。それに、婆さんになっていくら大金が転がり込んできても意味ないもんね。

恒彦

パパがいつまで生きるにしても、お前達に金を残そうなんて気持ちは更々ないよ。

姫子

あのね、パパがどんなに私たちを嫌ってて遺産を全部どこの馬の骨か分からない女だけに残そうとしても、私たちには遺留分っていう法律で守られている権利があるの。子供に一銭も残さないなんて日本の法律では出来ないのよ。

和夫

お前、よく知ってるな。

姫子

友達のパパが弁護士だからこの間遊びに行ったときに聞いてみたの。

和夫

お前の高校程度低いのに親は弁護士とかいるんだ。

姫子

バカね、パパ違いよ。

和夫

あ、そういうことか、納得。

恒彦

我が子ながら、お前達はずくづく頭が悪いな。パパはお前達に取られると分かっていながら遺産なんて残さんよ。死ぬ前に全部使い切るか生きている間に気に入った人間にくれてやるさ。

姫子

何よそれ。

恒彦

遺産じゃない。生きている間に譲渡するんだ。お前達より信頼できる人間にな。

和夫

意義有り。今の恒彦氏の発言は多分に不穏当です。撤回を求めます。親父、そんな意地悪しなくたっていいじゃん。仮にも親子なんだからさ。

恒彦

切れるもんなら縁を切りたいさ。

園子

和夫、姫子、聞きなさい。パパが今言ったことは、パパ自身が自分の父親に  
されようとしている事なのよ。

姫子

え、

和夫

どういうこと？

園子

あなた達は、パパが死にさえすれば今にも鍋島家の財産が自分たちのものになるなんて思っているみたいだけど、それはとんでもない勘違いって事よ。

姫子

何が勘違いなの？

園子

この家の財産で、パパの自由になるものなんて何も無いの。家も土地も、病院の権利も、全部お祖父ちゃんの名義なの。

和夫　何だ、そのこと。ジジイは八十過ぎてるんだ。すぐに逝っちゃうさ。

恒彦　ピンピンしてるよ。後十年は生きるだろう。医者の方が言うんだから間違いない。

園子　それに待ってる時間はないの。来月になったら手遅れだわ。

和夫　なんか、全然話が見えない。

姫子　もったい付けずに話してよ。

恒彦　お祖父ちゃんに、女が出来たんだ。

和夫　あ？

姫子　どういうこと？

園子 だから、お祖父ちゃんに愛人が出来たのよ。みつともないったらありやしない。

和夫 (笑い)八十過ぎてるんだぜ。なんか、グロいね。

姫子 信じらんない。

園子 この親にしてこの子ありよ。あなた達も血が繋がってるんだから人ごとじゃないわよ。

和夫 俺はしっかり受け継いでます。

姫子 いやらしい。

和夫 まさか結婚するなんて言ってる訳じゃないよな。

姫子 許せない、そんなの。お祖父ちゃんに配偶者が出来たら、この家の財産半分をその婆さんが持つていく事になるじゃない。

恒彦 姫子、二つ間違ってる。女は二十五歳、婆さんじゃない。

姫子 え、

恒彦 それに、お祖父ちゃんは、死ぬ前にこの家の財産をその女に譲渡すると言っている。半分じゃない、全部だ。

和夫 ちよつと待つてくれよ。なんでそうなるんだよ。

恒彦 お祖父ちゃんにとってのパパは、私にとってのおまえ達と同じだ。気持ちはずよく分かる。財産を残す気にはなれないんだ。

和夫 そんな悟りきつたようなことを言っていていいのかよ。



姫子

そうよ、突然現れた赤の他人に、なんでこの家の財産を全部持っていかれなきゃなんないのよ。

園子

そんなことはさせないわ。ママだって。パパが一文無しじゃ、慰謝料が貰えないでしょ。だからこうやって話し合ってるのよ。

恒彦

お祖父ちゃん宛ての高額な請求書が増え始め、おかしいと思っていたら若い女とお祖父ちゃんが一緒だったのを病院の看護師が目撃したんだ。お祖父ちゃんに女の事を尋ねても何も話してくれない。その間も請求書はどんどん送られてくる。困っていたところへ、このダイレクトメールが届いたんだ。(和夫に渡す)

和夫

オフィス、向山？

恒彦

とにかく、相手の女の正体だけでも調べてもらおうと、パパはその興信所に調査を依頼したんだ。

(鍋島家の居間。向かい合って座っている良兼と恒彦の二人)

良兼 調査の報告書です。

恒彦、封筒を受け取り、中から書類を出して目を通す。

良兼 お帽子被っていらつしやいますが、写真の紳士は、お父様に間違いございませんね。

恒彦 ええ、間違いありません。

良兼 腕を組んでいるのは、中山洋子、二十五歳。なかなかの美人でしょう。二人がちょうど渋谷のホテルから出てきたところです。年齢差は実に六十二歳。いやあ、羨ましい。(恒彦の不愉快そうな様子に気づき)あ、失礼、何というか、ある意味男のロマンじゃないですか。

恒彦 ……それで、やはり金ですか、女の目的は。

良兼

その通りです。状況はかなり悪いようです。確証はありませんが、背後にヤクザ者とおぼしき影もございましてね。

恒彦

ヤクザですって、

良兼

しかし、お父様は極めて真剣に純愛なさっています。そのあたり、私個人的には感銘を受けてしまいました。

恒彦

(興奮して)冥土の土産話を作るために、家族の金を湯水のように使われてはたまりません。

良兼

ごもつともです。

恒彦

あいや、私が言いたいのは、八十七にもなってこんな馬鹿な事をして、あの世に行つて後悔するのは、父自身なんです。ですからここは何としてもその女に身を引いてもらわなくては。

良兼  
ヤクザと事を構える覚悟がお有りですか。

恒彦  
それは、

良兼  
女は確信犯です。お父様の素性を知った上で金目当てで近づいて来たんです。半端な額では交渉に応じないでしょう。それに、そんな時間はありません。(カバンからテレコを取り出す)最新の技術を駆使して傍受いたしました。(テレコのスイッチを押す。テープの声)

女(声)  
「ねえ、良かった？」

恒吉(声)  
「ああ、良かったよ」

恒彦  
これは、

(良兼、人差し指を口に当てる)

女(声)

「喜んでもらえて嬉しい」

恒吉(声)

「ワシも君に喜んでもらいたいんじゃない」

女(声)

「私だって良かったわよ」

恒吉(声)

「いや、そういう事じゃなくて、君に礼がしたいんじゃない。笑わんでくれ、ワシは老い先短いこの年になって初めて恋というものを知った。死んだ婆さんは親が勝手に決めた相手じゃったしな。心底好きな女ができる事が、こんなにいいもんじゃとは知らなんだ」

女(声)

「大げさなんだから」

恒吉(声)

「誕生日は来月の十日じゃったな」

女(声)

「憶えていてくれたの。嬉しい」

恒吉(声)

「憶えていたともさ。そして君の今度の誕生日は、君も一生忘れられん誕生日にしてやろう」

女(声)

「それって、何かすごいプレゼントのこと」

恒吉(声)

「そうじゃ」

女(声)

「でもこの間のベンツだって驚いちゃったのに、それよりすごいもの」

恒吉(声)

「ああ、もつともつとすごいんじゃ」

女(声)

「いったい何かしら」

恒吉(声)

「誕生日までの楽しみじゃ」

女(声)

「ヤダヤダ。ねえ教えてちょうだい。ねえ、教えて」

恒吉(声)

「こらこら、おおお、そんなことしたら、ワシやまた元気になってしまうわ  
ら」

女(声)

「ああ、パパ、パパったら」

恒彦

(叫ぶ)やめてください。

良兼

(テレコのスイッチを切る)この後がいいんですよ。あ、いや、つまり、プレ  
ゼントの内容なんですけどね。

恒彦

何を渡そうとしているんですか。

良兼

お宅の全財産です。

恒彦

な、な、何ですって、ば、ば、ば、馬鹿げてる。まったく、まったく、何を  
考えているんだ、そんな事しても、金を渡してすぐに女に捨てられるだけじ

やないですか。まったく、どうかしてますよ、あの爺さんは。

良兼

ご自分の生活費は別に考えていらつしやるようですよ。

恒彦

：：やっぱり、女を説得出来ませんか。

良兼

相手は素人じゃないんですよ。ああいう手合いは、獲物に食らいついたら放しませんから。

恒彦

じゃあ、どうしたらいいんですか。

良兼

考えようによつては、めでたいことですから、この際いさぎよく諦めて、むしろお父様に遅く訪れた春をご家族で祝福されると言うのはいかがでしょうか。

恒彦

とんでもない。赤の他人に横取りされる位なら、その女を殺してでも財産は守ります。



良兼

本当に。

恒彦

いや、言葉のあやですが……つまり、それ位許せないって事です。

良兼

しかし、お父様の決心はお固いようです。財産譲渡には理由が二つありますから。一つは、勿論女への想い。もう一つは、家族に対する嫌悪、ほとんど復讐心ですね。皆さんを落胆させる一番の方法だとおっしゃってます。よほどご家族の皆さんをお嫌いになっているようです。

恒彦

うちはみんなそうです。だから父が我々をどう思おうと構いません。嫌っているのはお互い様ですから。それより問題は、いかに財産を守る事が出来るかです。

良兼

なるほど。そこまで割り切ってお考えでしたら、ヤクザなんかと関係のある難しい方ではなくて、簡単な方をターゲットになさいますか。

恒彦

…どういう意味ですか。

良兼

失礼ですが、それ程深い絆で結ばれたご家族でもないようですし、客観的に見ても、これから先のある若くて美しい女性が突然亡くなるより、すでに充分長生きなさっているお父様の寿命が予定より少し短くなる方が、自然の摂理にも叶っているんじゃないかと思うんです。女の手に渡る前に財産を相続してしまおうんですよ。

恒彦

つまり、父を…殺すって事ですか。

良兼

言葉が穏やかじゃありませんね。事故か、あるいは病気です…ちよつとしたきっかけは必要ですが。

恒彦

…いくら何でも、それは…。

良兼

(笑う)冗談、冗談ですよ。いくら何でも、ねえ、それじゃあ犯罪ですから。

しかし弱りましたね。放っておけば、全ては女の手に渡る。お父様も女も説得するのは不可能。八方ふさがりの状況の中で残された時間もわずか二十日足らず。これでは手の打ちようがない。

恒彦

…あの…そういう事って、うまくいくもんですかね。

良兼

え、

恒彦

つまり、その、父を…。

良兼

(ニタリと笑う)一緒に暮らしている高齢者が家族のちよつとした不注意や判断の誤りで不幸にして亡くなるなんて事は世間ではよくある話です…実は、年間二、三件はあるんですよ、こういった依頼も。ノウハウも確立していますから、絶対にうまくいきますよ。

(鍋島家の居間。再び家族四人)

恒彦

その興信所の所長が言うには、これは家族全員の合意と協力がないと出来ない計画なんだ。

和夫

親父、本気かよ。

恒彦

パパはこの家の立直しを計ろうなんて不可能な事は考えちゃいないそうじやなくて、自分の人生を初期化したいと思っっているんだ。

姫子

初期化って、

恒彦

全てを捨てて、ゼロからやり直すってことだ。考えてみれば、医者なんて仕事も。パパには向いていなかった。病院は人手に渡して、パパはオーストラリアに移住するんだ。好きな女とな。

和夫

オーストラリア、

園子

ママもこれまでの事は、何も無かったことにしたいの。パパとの結婚も、あなた達を生んだことも。もともと妻や母親なんてママには向いてなかったのよ。似合わない事したら、あなた達みたいな出来損ないが生まれちゃったの。お金が入ったら、自分で商売でも始めたいわ。

姫子

言ってくれるわね。普通親が子供にそんなこと言う。

和夫

馬鹿、普通じゃないんだよ、うちの家は。

姫子

まあね。

恒彦

お前達も、自分の好きなように生きて行けばいいさ。だから、お祖父ちゃんが死んだら、財産は四人で頭割り、この家は解散だ。

姫子

条件としては悪くないわね。

和夫

親父が死ぬのを待つ必要も無くなるしな。

恒彦　　じゃあ、いいんだな、話を決めても。

園子　　やりましょう。（互いの顔を見合わせ頷く。暗転）

軽快な音楽の中、話者が一人ずつ闇に浮かぶ。

沙絵　　私は反対、足手まといだもの。それに何より肇君は純粹すぎる。彼みたいなタイプはこんな仕事に手を染めちゃいけないのよ。

宍倉　　いいんじゃないの。同じ面子ばかりだと変わり映えしないし、馬鹿正直な純粹さもやりようによつては役に立つからさ。

恒彦　　家族全員の気持ちが決まりました。父には早めに成仏してもらいます。

肇　　俺、沙絵先輩も一緒じゃなきや辞めません。こんな仕事先輩にだって似合い

ませんよ。

良兼

沙絵君、今回君と私は後方支援に回る。現場には安倉と肇君の二人を派遣しよう。

沙絵

今だったら間に合うから早く辞めちゃいなさい。本当は言いたくなかったんだけど、肇君、今度の大きな仕事って言うのはね、

肇

え、嘘でしょう……まさか……そんな。

(音楽が止み、後ろ向きの良兼にスポット)

良兼

(ゆっくりと振り返り)とまあ、その爺さんというのがひどい奴でねえ、人間の皮を被った悪魔というのはこういう男の事をいうんだな。おかげで家族みんなの心もすさんでしまった。すべての元凶はこの爺さんだ。だから、非常に残念だが、こちららも心を鬼にして最後の手段に訴えるしかないんだ。頼むよ、肇君。(暗転)

宍倉（声）

ごめんください。ご在宅ですか。ごめんください。（ドアが開く音）あ、おじゃまします。

（鍋島家の居間。下手に立っている宍倉と肇。恒吉うさん臭そうに二人を迎え入れている）

宍倉

おじゃまします。あの、

恒吉

（突然、ステッキを宍倉の鼻先に突きつけ）姓は鍋島、名は恒吉。

宍倉

はい？

恒吉

大正十四年十二月十四日生まれ、当年とって八十七歳。

肇

あの、



## 恒吉

(身振り手振り、時にステッキを使つての立ち回り)外様とは言え三十五万七千余石、肥前鍋島の血を引く侍の家に生を受け、文武二道に精進したるなり。生家は西国佐賀の地にありて幼少の頃より鍛えしは、柔道剣道弓道水練孔孟の教えオイチョカブ。並ぶ者無き神童が若き血潮のたぎるに任せ奉公人菊に夜這いをかけたるは十四の春、騒がれて本懐を遂げざりしは我が人生躰きの始めなり。ままよとばかりに浮名流せし女郎の数は浜の真砂か満天の星。これではならじと武士の心に立ち返り、己が命を天下国家に寄与せんと大志を抱きし十六の秋、医学の道を志す。柳条湖事件に端を發したる満州事変より幾多の大戦を経て、玉音の御(おん)放送を聞きたるは十九の夏。宮城(きゆうじょう)に赴きて自決せんと欲すれども凡人の凡庸なるしがらみにて命長らえ、(下手に向かい退場しながら)心ならずも同郷のめのこを娶りしはあることか明くる昭和二十一年の師走。(階段を上りながら)物の弾みで愚息恒彦もうけしは、三十四の春であった。(大きく見栄を切り、退場)

(宍倉と肇、あつけに取られ恒吉の行方を見ている)

園子

(上手より登場) あら、ごめんなさい、興信所の？

宍倉

ええ、オフィス向山から来たんだけど、

園子

パパ、和夫、姫子、いらしてるわよ、(宍倉たちに)ごめんなさい、驚かれましたよう。

宍倉

いや、うちにも似たようなのがいるから。

恒彦

(上手より登場) いやこれはどうもすみません。父のあれが始まったものですか、

姫子

(上手より登場) うるさくて奥にひっこんでたの。(続いて和夫も登場)

肇

あの、お祖父様は何を、

和夫

おたくらに挨拶してた訳じゃないから気にしないで。

姫子

残念ながらボケてる訳でもないしね。

恒彦

ボケ防止のつもりなんですよ。自分のこれまでの人生を忘れないように大声で確認するんです。毎朝ですからね家族はたまりませんよ。

姫子

でもジジイがいろんな意味で超現役なのは証明済みなんだし案外効果あるのかもね。

和夫

親父も始めりゃいいんだよ。ジジイより先にボケそうなんだから。

恒彦

すみませんね、お恥ずかしいところをお見せして。こいつらバカな事ばかり言ってますが、普段はもつとバカなんです。

園子

いいかげんにしなさいよ。

宍倉

(階段の上を指して)この時間はいないって聞いて来たんだけど。

恒彦 すみません。予定が変わったようで。

宍倉 そういふの困るんだよね。こういう事って情報が確実じゃないとき、

恒吉 (突然、階段の上に飛び出す)しかして神は老兵を見捨てたまわず。(階段を

下り)鍋島恒吉八十五にして初めて真の愛を知りたるなり。老いらくの恋と笑わば笑え(下手に向かいながら)今日も我いざ行かん麗しの君の元へ。(立ち止まり)平成十八年七月吉日。(ポケットから懐中時計を取り出し)前

十一時十五分。(退場)

和夫 もう大丈夫だよ。あのフレーズの後は戻ってこないから。

宍倉 思いつきし不安になるなあ。

恒彦 すみません。